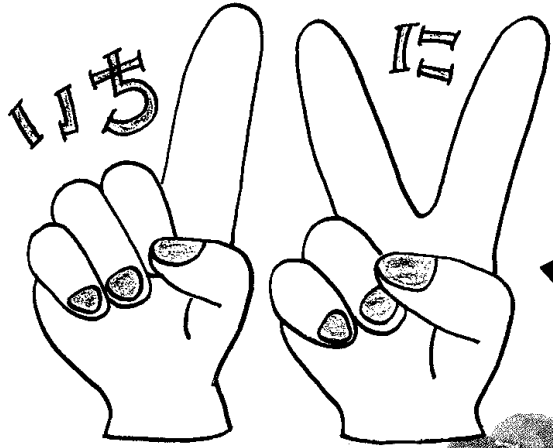


ついで



「いちに」
 といふのは、いちにの卸売市場を訪ねてみよう。
 手帳になり
 ここには平成二年五月のこと。県下初の第三セクター市場として、五回目のお正月を迎えたところだ。

市場には、卸専門の青果一社（長浜合同青果）と水産二社（長浜水産・魚市）のほか、関連店舗二十七社が集まっている。市場全体を運営・管理しているのは、長浜地方卸売市場。長浜市も五十一％の資本金、一億五千三百万円を出している。

さて、「市場の朝は早い」と昔から決まっているが、ここでは早い朝どころではなく、真夜中といったほうがよい。一番に動きはじめるのは、名古屋や京都の中央卸売市場へ海産物を買付けにくトラックたちだ。午前二時にはここを出ていく。

六時半近くになると、東の空、霊仙のあたりが朝焼けに輝き始めた。長浜ドームは背を丸めてまだおやすみのご様子。こんな時間だが、場内は別世界だ。

「おはようございます」と挨拶が飛び交う通路、行き交う人も足早だ。二十七の関連店舗は、商品の陳列などに忙しい最中である。

市場の最長老、北村新一さんは、「米新」さんの現役だ。

「八十四歳というと明治のお生まれですか」と聞いたら、

「そんな年寄りやない、大正元年や」と元氣な返事がかえってきた。

市場といえはやっぱりセリ。長浜地方卸売市場（中村春三社長は、「地場野菜のセリが七時三十分から始まるで案内するわ」と心安く応じてくれた。子鈴が場内に響くと、東南にある地場野菜のセリ場へと三、四十人が集まる。昔懐かしいリンがチリンチリンと鳴って、いよいよセリの始まりだ。

セリを仕切るのは「セリコ」と呼ばれる男たち。青い帽子の買受人に対し、セリコは赤い帽子をかぶっているのを見分けは簡単だ。

セリコになるには、知事の許可もいるのだそう、

「あいつも五年ほど苦労しよったけど、立派な一人前になりよった」

と、松井博之さんを指して嬉しそうな中村さんと。

松井さんの、一度は完全につぶれたことがある野太い声が、よく通る。大根や白菜などが次々とセリにかけられていく。

セリコは、大勢の客が居並ぶなかで、買値を示す何人もの指の合図を瞬時に読み取り、次々と商いを成り立たせていく。松井さんも最初は遅いのだのなんだのと、幾度も叱られたそう。

いったいいくらで、どのお客が落としたのか、素人目にはほとんどわからないが、とにかくカタづいていっていることは確かのようにだ。落札した業者の番号とその価格を荷札に記入するのでもセリコの仕事だが、この間もセリコの声止まることはない。

市場に持ち込まれる青果のうち、近隣産の地場ものが約十五％で、他の地域から入荷する「レールもの」が八十五％。鉄道で輸送していたころの「レールもの」という呼び方が今もこのころの「レールもの」という呼び方から米原町産が多いが、彦根市や浅井町あたりからやってくる農家もあるとのこと。

地場野菜のセリが終わると、場を青果卸売場に変えて「レールもの」のセリが始まる。記念写真のヒナ壇のようにここに、青い帽

子の買受人たちが立ち、その前のローラーに、広島産のミカンなどが順に運ばれて、次々とセリにかけられていく。



▲「ワシは大正生まれやで」と元氣な、北村新一さん



▲中村春三社長



▲立ち並ぶ買受人たち

わっている。また、小谷落城のとき、長政はお市と三人の娘たちを城から逃がしたが、そのとき彼女らがかくまわれたのが、この実宰院だという説も残されている。果たしてお市も、三人の娘たちといっしょにこの寺を訪れたのだろうか。

ここから国道三六五号を北へ向かい、浅井町から湖北町に入るころ、右手に近づいてくる山が小谷山だ。「小谷城跡・小谷寺」という大きな標識を曲がると、麓へ向かう道がまっすぐついている。

南麓の小谷寺には、落城の際お市が納めたという「愛染明王」像が安置されている。全身真っ赤。憤怒の表情。高さ三十センチほどの小さな像は、お市の念持仏だったという。毎日この仏さんに手を合わせていたのだろうか。「これは愛情の仏さんなんですよ」と、お寺の方が教えてくれた。

そのかたわらに並ぶのは木製の長政像。娘・茶々が、父・長政の供養のため、後年納めたものだという。肖像画よりもふっくらとした顔立ちから、柔和そうな人柄が偲ばれる。非公開放だが、小谷寺には、お市の守り刀とされる三十センチほどの短刀も収蔵されているとのことだ。

浅井家の菩提寺である長浜市平方町の徳勝寺には浅井三代のお墓があるほか、亮政、久政、長政の三代、亮政公夫妻、長政公夫妻の木像も拝観できる。おひなさまのように、台座に並んだ長政とお市、二人の姿は、これも

ずいぶんふくらんだ。

木之本町古橋の仏像収蔵庫・世代閣には、お市が、鶏足寺の末寺である飯福寺へ寄進したという、あざやかな花の図柄の屏風が陳列されている。パンフレットなどで見られるお馴染みのお市の肖像画は、高野山持明院に残されたものだ。

幸福だった

長政との十年

兄・織田信長による政略結婚だったとはいえ、お市が小谷城で過ごした約十年は幸福な日々だったと、多くの書物に記されている。絶世の美女と伝わるお市を、長政は心から慈しみ、お市も心を捧げたのだろう。そんな暮らしぶりの一端でも感じられないだろうか、城跡を訪ねてみた。

小谷城は典型的な山城である。林道のつきあたりにある案内図を右の方へ入って行くと、まず番所跡の表示。ここから先が、城内主要部となる。山の斜面に沿って次々と現れる史跡を、石標と解説板が案内してくれる。京極丸、小丸、中丸など、数々の屋敷跡。馬洗池、首据え石、刀洗池などの名称からは、生々しさがぬぐえない。

登り道からはずれるが、すくみそうになる足を励まして細い道を右に下って行くと、長

政が自刃したという赤尾美作守屋敷跡に出る。思わず手を合わせてしまう人も多いのか、「長政公自刃の地」という碑の前には、お賽銭が積まれている。

桜の馬場から大広間跡に入ると、山の中腹であることを忘れそうな空間が出現する。三千平方メートルの広さがあるという。山王丸まで約三十分。西方を望めば、傾きかけた陽光のなかに竹生鳥が浮かんでいる。

長政亡きあと、この城には豊臣秀吉がしばらく居住しているが、やがて城下の屋敷や寺院などを長浜に移してしまった。その名残は、市内の町名などにみられる。

多くの歴史家が、定かでない痕跡をたどりながら、この山を調べ歩いたことだろう。素人のロマンだけを抱いても、お市を偲びつつ同じ場所に立つわたしにも、何か語りかけてくるような気がした。

現代にながれるお市の血筋

一五七三年、小谷落城。その後、兄信長のもとへ戻ったお市だったが、本能寺の変で兄が倒れたあとの跡目争いの余波をうけ、福井・北ノ庄城の柴田勝家のもとへ興入れることになる。北ノ庄での生活はわずか半年。一五八三年、賤ヶ岳の合戦で秀吉に敗れた勝家と

ともに、お市は命を絶つ。

柴田家へ嫁ぐとき、彼女は、もはや自分の一生のほとんどを終えた気持ちだったのではないだろうか。「娘たちの将来の後ろ楯を確保するための再嫁だったのでは」という説に、思わずうなずいてしまう。

三人の娘たちは、それぞれ、秀吉の側室淀殿、京極高次夫人、徳川秀忠夫人となり、現代にその血筋は絶えていない。

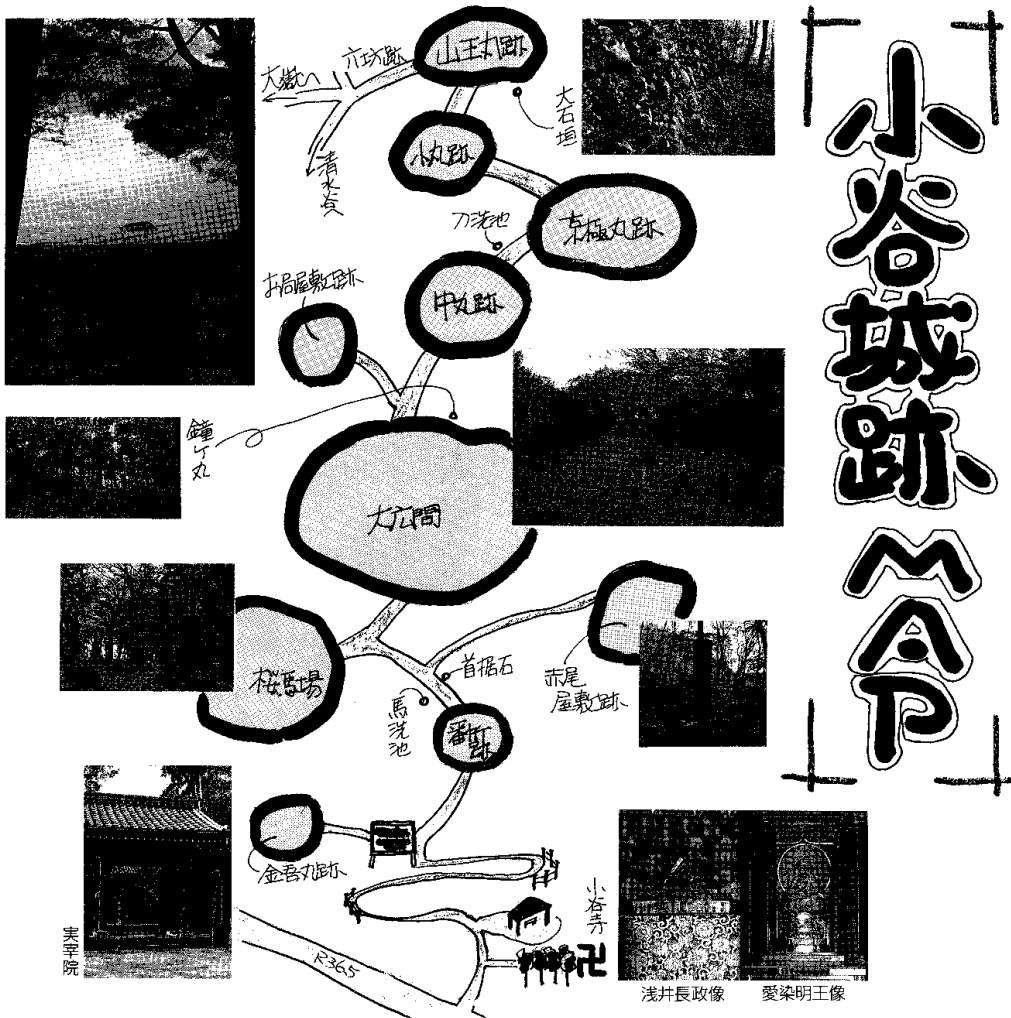
戦国の世の女として凝縮された時間を生きていったお市の生涯には、わたしたちに推し量ることのできない悲哀がある。

光るびわ湖の小波に、彼女がしばし刻を忘れた日もあったかもしれないと、小谷山からの風光にそのよすがを求めようよりほかはないようだ。いまは城跡となったこの地に、彼女が夫や子どもたちと暮らしていたことはまぢがいない。

ハイキングの家族連れが、大広間跡を駆ける子どもたちに声をかけている。ここに城があったころ、お市が子を呼ぶ声も、きっと城内に響いていたのだろうか。

(葉月 蘭)

小谷城跡MAP



浅井長政像 愛染明王像

■参考文献

- 『戦国の近江』(徳永真一郎)
- 『流星』(永井路子)
- 『小谷城物語』(馬場秋星)